『西南アジア研究』No. 82, 2015

バッシャール・ブン・ブルドと サーリフ・ブン・アブドゥルクッドゥース
——二人の詩人に付されるマニ教・二元論的逸話の展開——

田　中　悠　子

は　じ　め　に

バッシャール・ブン・ブルド Bashshār b. Burd とサーリフ・ブン・アブドゥルクッドゥース Ṣāliḥ b. ʻAbd al-Quddūs は，ヒジュラ暦 2 世紀にバスラにおいて詩人として活躍したイラン系マワーリー知識人である［Blachere 1959 : 1080-2 ; Zakeri 1995 : 984-5］。彼らはその詩作の巧みさによって著名である一方で，伝記史料中において様々な非（反）イスラーム的性質を伴う異端的逸話が語られていることでも知られている[1)]。例えば，ヒジュラ暦 4 世紀の文人イブン・ナディーム Ibn al-Nadīm（d. ca 388/998）は著書『目録 *al-Fihrist*』において，「ザンダカ思想を隠してムスリムのふりをしていた者たち」のリストの中に彼らの名を挙げている。それによれば，彼らは「二元論とその信奉者の教義」を支持した活動を行っていたという［Fihrist : 522］。「ザンダカ/ズィンディーク」[2)] は様々な非正統的思想やその保持者に関して用いられる用語であるが，イブン・ナディームはマニ教に関する詳述の後に上記の記述を配していることから，ここではマニ教的思想を指すと考えられる。

初期イスラーム時代の史料中においてマニ教やその他の異端的思想と関連付けられズィンディークとして言及される人々についての研究は，ヴァジュダに始まり，ガブリエリやターヘリー・イラーキー，ショクルによって，様々な史料から彼らの伝記的情報を集める作業が行われてきた［Vajda 1937 : 181-222 ; Gabrieli 1961 ; Taheri-Iraqi 1982 : 201-259 ; Chokr 1993 : 211-232, 265-308］。これらの先行研究では，バッシャールやサーリフは実際にはマニ教徒ではなく，ムスリムとして活動していたと考えられることが指摘されている。しかし，これまでの研究はズィンディークとして非難された人々の実際の信条や活動を明らかにする

1）　詳しくは後掲の先行研究を参照されたい。

2）「ザンダカ zandaqah」或いはザンダカ思想を持つ者を指す「ズィンディーク zindīq (pl. zanādiqah)」は，サーサーン朝時代に非正統的な教えを説く宗教形態，主にマニ教を指したペルシア語の単語がアラビア語に取り込まれたものである。その後もマニ教その他の二元論に基づく思想に対して用いられたが，非正統的思想や反イスラーム的な思想を包括的に指すようになった［Lewis 1953 : 54-5］。

ことに主眼を置いたものであり，現在に伝わる逸話の多くが彼ら自身の活動期よりも後の時代に表れ，様々なヴァリアントを伴って広がっていったのだという点に十分な関心が払われていないように思われる。一方でザマーンは，「ザンダカ/ズィンディーク」は人々が様々な異端的イメージを仮託し批判することによって自らのアイデンティティーを確立してきたところの，“others”という概念として機能していたと指摘している［Zaman 1997: 63-9］。この指摘に従えば，ズィンディークとされた人々の言説については情報の真実性を検証するだけでなく，その「語られ方」により注意を払う必要があると言えるだろう。人々がどのような「ズィンディーク」像を描き，またそれは各時代の背景にどのように対応してきたのか。この点を考察するためには，「ザンダカ/ズィンディーク」に関する言説の形成過程を歴史的に検証する必要がある。そこで本稿ではその出発点として，バッシャール・ブン・ブルドとサーリフ・ブン・アブドゥルクッドゥースに付された様々な異端的言説の中から，マニ教・二元論に関わる逸話に絞り，それがどのように構築されていったのかを整理する。

ともに『目録』に名が挙がっていることに加え，バッシャールとサーリフの共通点は，アッバース朝第3代カリフ，マフディーが行ったズィンディークへの異端審問政策の中で逮捕されたとする逸話が語られていることである。そうした逸話は彼らの異端的性質を端的に示すものとして流布していったと考えられる。そこで本稿では，まずマフディーのズィンディーク迫害政策がどのようなものであったかを年代記から概観した後に，それと比較しながらバッシャールとサーリフそれぞれの逸話をまとめることとする。

I　マフディーによる対ズィンディーク政策

タバリー Ṭabarī（d. 310/923）の年代記を中心とする年代記史料には，アッバース朝第3代カリフ，マフディーがズィンディークの逮捕・処刑政策を行なったことが語られている。逮捕・処刑事例は，163/779-80年からマフディーが亡くなる169/785年までと，その後継者ハーディーの短い治世中に集中して見られる。167/783-4年にはズィンディークの逮捕を専門的に行う役職としてサーヒブ・アッザナーディカ Ṣāḥib az-Zanādiqah が設置され，ウマル・カルワーズィー ʻUmar al-Kalwādhī なる人物が，翌年にはハムダワイフ Ḥamdawayh なる人物がその任に就いたことが記されている［Ṭabarī III: 520, 522; Wuzarāʼ II: 156］。逮捕された者はカリフの御前に連行されて，審問を受けるのが常であり，カリフは悔悛 tāba した者を解放し，そうでない者は投獄ないし処刑するなどの判断を下したという。

被逮捕者の思想や行動が年代記に詳しく語られることは少ないが，163年の一例[3]を除き，

3）ビザンツ遠征途上のアレッポ周辺において，マフディーはムフタスィブのアブドゥルジャッバール ʻAbd al-Jabbār にその地のズィンディークたちを連れてくるよう命じ，連れてこられた者たちを改宗させ，拒む者を磔にした。この時改宗と処刑の対象となったのは，キリスト教徒とマニ教徒であったとみられる［Ṭabarī III: 499; Chronique, III: 3］。

年代記に「ズィンディークとして逮捕された」として名前を挙げられる者の多くは，名前や立場からムスリムであったことが推測できる[4]。しかし同時に，カリフの御前にてクルアーンの章句を唱えることができず，代わりにマニ教徒の聖句に似た言葉を唱えたという事例が存在する[5]。カリフが「二元論者・マニ教徒がムスリムを惑わせている」と述べ，神の唯一性の教義を守る者として自らを位置づけたとする記述も年代記中に見られる[6]。こうしたことから，この政策において逮捕されたズィンディークにはマニ教的思想の影響を受けたムスリムが含まれたか，もしくは少なくともそのように考えられていたことが推察される。そうした者を自らの前に連れてこさせ，悔悛させる，または処刑の判断を下すという行為が，この時代，宗教的最高権威者としてのカリフの立場を顕示する手段として用いられたものと考えられる[7]。

以上の点を踏まえつつ，次章以下でバッシャールとサーリフに付加される逸話を検討することとする。

Ⅱ　バッシャール・ブン・ブルド

1　思想，性格，同時代における評価

バッシャール・ブン・ブルドに後代にどのような逸話が付与されていくかを示すため，まずは彼自身の詩作や同時代の情報を中心に思想や行動，同時代人による評価を確認する。バッシャールはウカイル族のマワーリーであり，盲人であった。権力者への賞賛詩，風刺詩，享楽や飲酒，恋愛を詠った詩作で名高いが，情熱的な恋愛詩はあまりにも持て囃されたため

4）　年代記中に個人名が明記されている被逮捕者は，以下の通りである。Dāwūd b. Rawḥ b. Ḥātim, Ismā'īl b. Sulaymān b. Mujālid, Muḥammad b. Abī Ayyūb al-Makkī, Muḥammad b. Ṭayfūr, Ibn Abī Ayyūb, Sulaymān b. Ayyūb al-Makkī, Zā'idah b. Ma'n b. Zā'idah, 'Abd Allah b. Abū 'Ubayd Allāh, Dāwūd b. Dāwūd b. Alī, Ya'qūb b. Faḍl, Yazīd b. al-Fayḍ, Yazdān b. Bādhān［Tabarī III : 490, 517, 520, 549-50 ; Wuzarā' II : 153-4, 156 ; Ansāb : 326］。マワーリー出身で改宗から2～3世代を経たカリフ宮廷高官の子弟，ウマイヤ朝時代から続く有力家系やアラブ部族，中でもハーシム家出身者，または改宗1世代目のマワーリーなど様々な層から逮捕者が出ている。

5）　この聖句について史料にはマニ教との関係性は明記されていないが，ショクルがこれを指摘している［Wuzarā' II : 153-4 ; Chokr 1993 : 73］。

6）　タバリーによれば，マフディーは後継者ハーディーに「息子よ，もしお前にこの仕事（カリフ位）が受け継がれたら，この連中，すなわちマニの支持者 aṣḥāb Mānī（に対処すること）に専念せよ」と指示を下したという。マフディーは「マニ教徒」が行うという多神信仰や近親相姦，幼児の誘拐と言った悪行を列挙した後，「だから彼らのために（磔刑のための）板を打ち立て，剣の鞘を払え。そして彼らに関する事柄において，他に並び立つ者無き神に近づくのだ。なぜなら，私はお前の祖先のアッバースが夢の中で私に二本の剣を授け，私に　二元論宗教の信者を殺すように命じるのを見たからだ」と述べる［Ṭabarī III : 588］。

7）　この異端審問に関する詳しい分析は，筆者の修士論文「アッバース朝初期の「ザンダカ」に関する一考察 ―― 逮捕・処刑事例を手がかりに ――」（未公刊）に詳しく述べた。

に有力者からは危険視されたようである[8]。イブン・ムウタッズ Ibn Mu'tazz (d. 296/908) がバッシャールの甥から伝えているところによると，彼は「人々に宗教的知識を教え，聖典をよく知っていた。しかし（中略）堕落して名声を失った」という [Shu'arā': 22]。ジャーヒズ Jāḥiẓ (d. 255/869) は，この時代の名高い神学者の一人ワースィル・ブン・アター Wāṣil b. 'Aṭā' とバッシャールは仲間であったが，その後決裂したと伝えている [Bayān I: 24]。他の逸話によれば彼は「バスラの六大神学者」の一人として神学議論に参加していたが，その後堕落したという [Aghānī III: 146]。以上のことから，バッシャールは当初宗教的知識の豊富な知識人として神学議論に加わっていたが，過激な恋愛詩や堕落から，神学者らと袂を分かったことが推察される。

また同時代の詩人との風刺詩の応酬からは，その毒舌ぶりや無頼な態度によって非難されていたことが窺われる [Bayān I: 30-31]。アブー・ヌワース Abū Nuwās (d. ca. 198/814) は，バッシャールが同時代の詩人ハンマード・アジュラド Ḥammād 'Ajrad を二元論者であると罵倒し，ハンマードもまたバッシャールがザンダカ思想を持っていると言い返したとの逸話を伝えている [Aghānī XIV: 324-5]。またバッシャールが別の同時代人を不信心なズィンディークとして批判している詩も伝えられており [Aghānī III: 147]，こうした逸話からは，すでにこの時代の知識人らの間で，「ズィンディーク」という呼称を用いて互いを批判することがよく行われていたことがわかる[9]。さらにバッシャールは時に宗教的に過激な内容の詩を詠み，議論を呼んでいた。

大地は暗く，火は輝く

火は生まれた時から崇められるべきもの [Aghānī III: 145; Bayān I: 16]

彼のこの作品に対して同時代の知識人たちが反論した詩が，ジャーヒズによって少なくとも三篇紹介されている [Bayān I: 27-9, 32]。地ー闇と火ー光の対比はマニ教を連想させ得る。しかしジャーヒズの記述や同時代人がこの詩へ行った反論を検討したターヘリー・イラーキーとショクルは，この詩は火から創造されたイブリースが土から創造されたアダムへの平伏を拒絶したというクルアーンの内容に立脚したものであって同時代人もそのように解釈していたことを確認し，マニ教とは無関係であると結論づけている [Taheri-Iraqi 1982: 220-221; Chokr 1993: 287-289]。

バッシャールにはまた，グラートとの関係性が指摘される場合もある。同時代の詩人サフ

8） バッシャール自身の詩に基づく情報として，ある時マーリク・ブン・ディーナール Mālik b. Dīnār という人物がバッシャールの家を訪れ，厳しく咎めたことが伝えられている [Aghānī III: 170]。

9） レヴィスは，イスラーム社会において知識人や学者が論難すべき相手を異端者ないし不信仰者と呼ぶことは珍しいことではないこと，これは刑罰や追放，処刑を伴うような異端認定とは別であることを指摘している [Lewis 1953: 59]。ターヘリー・イラーキーもまた，ズィンディークとして批判されることとズィンディークとして処刑されることは分けて考えるべき問題であると指摘している [Taheri-Iraqi 1982: 225]。

ワーン・アンサーリー Ṣafwān al-Anṣārī がバッシャールに対する反駁詩の中で，

汝はアブー・バクルを愚弄しその後のアリーをも否定し

すべてをブルドに帰するというのか？［Bayān I : 29］

と述べており，ショクルはここに，グラートの一派であるカーミリーヤ Kāmiliyya[10]の思想を見出している［Chokr 1993 : 289-90］。しかしターヘリー・イラーキーが指摘するように，たとえ一時的にその傾向を示したとしても，バッシャールがその思想を持ち続けたとは考えにくい［Taheri-Iraqi 1982 : 216-8］。常にその時々の権力者に賞賛詩を贈り褒賞を得ていたこと[11]は，むしろ権力否定的なグラートとは正反対であるとも思われる。

以上のことから，バッシャールは神学議論に参加するような知識人でありつつも，詩における表現活動は極めて自由であり，辛辣な性格や過激な表現から「ズィンディーク」との批判を浴びていたのだということがわかる。ただしこうした相互の批判の応酬は当時の知識人社会にあっては珍しいことではなく，彼がマニ教やその他の危険思想に深く根ざしていたことは，少なくとも彼自身の詩作や同時代から伝わる情報には，明確には表れていない。

2　処刑

バッシャールの処刑に至る経緯については，タバリーが同時代ないし直後の時代に生きたと考えられる証言者[12]より，以下のことを伝えている。

ヤアクーブ・ブン・ダーウードの兄弟であるサーリフ・ブン・ダーウードがバスラ総督に任命された際，バッシャール・ブン・ブルドは以下のよう（な詩で）彼を風刺した：

彼らはサーリフをミンバルに乗せた，汝の兄弟を

汝の兄弟のためにミンバルは悲鳴をあげた［Ṭabarī III : 538］

ヤアクーブ・ブン・ダーウードは当時宰相位にあり，この詩はその権勢ぶりを揶揄したものである。この風刺詩を耳にしたヤアクーブは怒り，バッシャールがカリフを風刺したとする詩をカリフの耳に入れた。しかしカリフがバッシャールを問いただすために召喚しようとすると，バッシャールの巧みな詩作によってカリフの怒りが解けることを恐れ，ヤアクーブ

10）カーミリーヤの教義では，預言者によるアリーへの後継指名を無視したその後のあらゆるカリフたちに加え，正統な権利があるにも関わらずそれを軽視し預言者の意志を反故にしたアリーをも，棄教者と見なす［Farq : 39-42 ; Chokr 289］。

11）ウマイヤ朝期にはウマイヤ家出身のバスラ総督スライマーン・ブン・ヒシャーム Sulaymān b. Hishām へ賞賛詩を贈っていたこと［Aghānī III : 217］，アッバース朝期には宮廷に出入りしてアッバース家カリフへ賞賛詩を贈っていたことが，残された詩からわかる（例えば［Dīwān I : 257, 278-9］）。また，バスラを拠点の一つとしたアリー派の反乱時には反徒を称揚してアッバース朝カリフを誹謗する詩を編み，反乱軍が敗北するや即座にカリフへの賞賛詩へと作り変えて献上したという逸話も残る［Aghānī III : 156］。

12）ヤズィード・ブン・ワハブ・ブン・ジャリール Yazīd b. Wahb b. Jarīr。彼自身の生没年は不明であるが，父ワハブが 206/821 年没であることから，ヒジュラ暦 2 世紀末には活躍していたと考えられる［Sezgin 1967 : 850］。

自らバッシャールへの仕返しのために人を差し向けたという。同じくこの顛末を記録するジャフシヤーリー al-Jahshiyārī (d. 331/942) とイスファハーニー al-Iṣfahānī (d. 356/967) によれば，ヤアクーブが派遣した者はバッシャールを川へと投げ込んで溺れさせたという [Wuzarā': 158; Aghānī III: 244]。これらの記述に従えば，バッシャールの死亡はサーリフがバスラ総督に就任する 164/780-1 年 [Ṭabarī III: 501, 503] ないし 165/781-2 年 [Khalīfah II: 689] 頃であり，その原因はあまりにも辛辣な彼の風刺詩に対するヤアクーブ・ブン・ダーウードの私怨であった[13]。

その一方で，彼がズィンディークとして処刑されたとする言説が広がっていく。イスファハーニーが伝える他の逸話には，マフディーがバスラへ赴いた際，とある人物が「バッシャールはズィンディークです」と言ってマフディーへの風刺詩について密告したために，怒ったマフディーがバッシャールを捕らえさせて 70 回の鞭打ちによって死なせ，川へ投げ込ませたという経緯が語られている [Aghānī III: 245-6]。この逸話ではバッシャールはカリフへの風刺によって「ズィンディーク」として逮捕されたことになっている。しかし，第 I 章にて言及したように，マフディーの政策による逮捕事例では被逮捕者はカリフの御前において改宗ないし悔悛の機会を与えられるのが通例であった。カリフが怒りのままに死ぬまで鞭打たせたとする上記の逸話は，宗教的最高権威者として自らを喧伝する手段としての政策とは性質が異なっていると言えるだろう。この逸話に付されたイスナードによれば二人目の伝達者はアフマド・ブン・アビー・ターヒル（・タイフール）Aḥmad b. Abī Ṭahir Ṭāyfūr (d. 280/983) であり，その後バスラの伝承者たちが語っていたという。このことから，この情報は同時代の目撃者によるものとは考えにくいが，ヒジュラ暦 3 世紀半ば～後半頃にはこうした言説が語られ，その後語り継がれたことがわかる。

また，イスファハーニーが伝えるさらに別の逸話には，

> マフディーはサーヒブ・アッザナーディカのアブドゥルジャッバールに命じてバッシャールを鞭打たせた。（中略）彼は川で死んだ。[Aghānī III: 247]

とある。第 I 章に見た通り，サーヒブ・アッザナーディカはマフディーがズィンディークの捜索と逮捕のために 167/783-4 年に設けた役職である。アブドゥルジャッバールは，163 年アレッポにおいてマニ教徒と考えられる「ズィンディーク」を逮捕しカリフのもとへ連行したムフタスィブとして年代記史料に登場する [Ṭabarī III: 499] が，彼がサーヒブ・アッザナーディカの任に就いたとの記録はない。アレッポのムフタスィブであった彼がバスラにおいてバッシャールの逮捕時に居合わせたとは考えにくく，この逸話もまた後に出来上がったものと考えられる。この逸話の情報源はウマル・ブン・シャッバ 'Umar b. Shabbah (d. 264/877) [cf. Sezgin 1967 II: 43] であり，ヒジュラ暦 3 世紀半ば頃に語られ始めたと考えら

---

13) それ以前にもバッシャールがヤアクーブへの風刺詩を詠んでいたことが，ヤアクーブの父が伝えた情報によって明らかになっている [Ṭabarī III: 508]。

れる。

その上さらに，以下のような逸話も伝えられている。

マフディーがバスラに下向した際，サーヒブ・アッザナーディカのハムダワイフが随行し，彼のもとにバッシャールを連れてきた。（マフディーは）彼を鞭打つよう命じ，（中略）「ズィンディークよ，『神の名において』と言わなければ鞭打つぞ」と言うと，（バッシャールは）「ならば打て」と答えた。（中略）彼は鞭打ちによって死んだ。［Aghānī III : 250］

ここでバッシャールは「神の名において」と唱えることすら拒む不信仰者として描かれているが，詩を見れば彼が神に言及することが珍しくなかったことは明らかであり[14]，この場面は創作性の高いものと判断できる。この逸話からは，バッシャールがマフディーの対ズィンディーク政策の一環としてサーヒブ・アッザナーディカのハムダワイフにより捕らえられ，処刑されたのだという言説が流布していたことがわかる。この逸話のイスナードは三名の伝達者名を含んでいるが，筆者であるイスファハーニーの活動時期から考えて，3世紀以前に遡るとは考えにくい。

以上のように，バッシャールの死に纏わる逸話はヒジュラ暦3世紀を通して「ヤアクーブ・ブン・ダーウードの私怨による」というものから「カリフ自身が風刺詩に怒り，彼をズィンディークと断定した」というもの，あるいはさらに「バッシャールはサーヒブ・アッザナーディカの職責によるズィンディーク逮捕・処刑の対象であった（すなわちマニ教的思想を持っていた）」というものへと展開した可能性が指摘できる[15]。ヒジュラ暦3世紀後半に活躍した文法学者ムバッラド Mubarrad（d. 285/898）は完全にこの立場を取り，イスナードを添えることなく「マフディーは異端思想（ilḥād）のために彼を殺した」と述べている［Kāmil II : 177］。

3　マニ教・二元論に纏わる逸話

前節の最後に紹介したムバッラドは，ヒジュラ暦3世紀半ばに活躍したと考えられるバスラの学者マーズィニー al-Māzinī［cf. Sezgin 1967 II : 605］から伝えて，バッシャールがある者と交わしたという以下のような会話を紹介している。

ある者がバッシャールに言った。「汝の宗教で禁じられている肉を，なぜ食べるのか？」と。その者は彼を二元論者 thanawī だと見なしていたためである。するとバッシャールは答えて，「この肉は，闇の悪を私から取り除いてくれるのだ」と言った。［Kāmil

---

14）数多いが，例えば［Dīwān I : 257］。

15）イスファハーニーは「このようにバッシャールの死に関する逸話は数多くあり，私はその全てを収集してはいない。（もしそれをすれば）それだけで膨大な量になるだろう」［Aghānī III : 250］と述べており，毒舌で辛辣な詩人の死が当時，小噺としても人気のある主題であったことを暗示している。

II : 178]

「肉が禁じられている」とはマニ教における厳格な菜食主義を指していると考えられ，この記述からは，バッシャールとマニ教を関連付ける言説がこの頃に流布していたということを読み取ることができる。同時代の詩人同士が罵り合いの中で用いた表現を別にして，このように明確にバッシャールとマニ教を関連付ける逸話は管見の限りこれが初めてである。ヒジュラ暦5世紀のシーア派法学者ムルタダー al-Murtaḍá（d. 436/1045）も同様の情報を伝えており［Amālī I : 138］，後代の著述家にこの逸話が広まっていったことを示している。

Ⅲ サーリフ・ブン・アブドゥルクッドゥース

1 思想，性格

アズド族のマワーリーであったサーリフ・ブン・アブドゥルクッドゥースは詩人として名高い他，バスラにおいて説教師として活躍していたことがわかっている［Irshād III : 419-20 ; Lisān III : 172］。イスファハーニーが伝える逸話によれば，バッシャールと同様「バスラの六大神学者」の一人であったという［Agānī III : 146］。ショクルによればサーリフが行った説教の一つがキリスト教徒の手によって記録されており，そこで彼はクルアーンに基づく表現を駆使しつつ，現世的享楽の無意味さの自覚と悔い改めを求めている［Chokr 1993 : 225］[16]。また彼の詩は現世の災厄や不幸，人々の堕落，偽善を嘆くものが多く，総じて禁欲的な思想が表れている［Taheri-Iraqi 1982 : 204-5］。

明日に定められたことから逃れることはできぬ

すべて来るものは刻々と近づく［Goldziher 1893 : 119］

といった詩作からは神による予定運命を重視していたことが窺われ，こうした説教や詩作からは，現世否定的で厳格な思想を持っていたことがわかる。サーリフの信仰や思想について詩や説教から考察したショクルは，彼が明らかにムスリムとして説教を行っていたと述べている［Chokr 1993 : 225］。それにも関わらず彼は，多くの逸話が伝えるところによれば，167/783-4年頃に当代のカリフ，マフディーによってズィンディークとして処刑されたという。サーリフに纏わる異端的な逸話はどのようにして流布したのだろうか。前章と同様に，処刑に関する逸話の語られ方から検討することとする。

2 処刑

サーリフの処刑に関する最も初期の情報は，イブン・アビー・ターヒル・タイフール（d. 280/983）がユーヌス・アル＝ハトリー Yūnus al-Khatlī なる人物から伝えた以下の記事で

16） この説教は ʻAbd Allāh Khaṭīb, *Ṣāliḥ b. ʻAbd al-Quddūs al-Baṣrī*. Baghdād, 1967, pp. 93-104 に収録されているが，筆者は未見である。

ある。

マフディーはサーリフ・ブン・アブドゥルクッドゥースをザンダカであると見なして，御前に連行させた。彼（サーリフ）は「いいえ，私は詩人です（中略）と言った。（マフディーは）彼がかつて詩の中で「年老いた者は変わることができぬ」と詠っていたことを思い出し，「ちょうどお前のようだ」と言って彼を処刑するよう命じた。[Lisān: 174]

この逸話からは，サーリフがズィンディークであると断じられた理由は明らかではない。イブン・タイフールがイスナードの二人目であることから，この情報はヒジュラ暦3世紀半ば～後半頃に流布したと推測できる。「サーリフが捕らえられてカリフの前で弁明ないし悔悛する（カリフがサーリフの教養に感激して赦そうとするという場面が挿入される場合もある）が，『年老いた者は変わることができぬ』との詩のために処刑される」という同型の逸話を，イスファハーニーがアフマド・ブン・ヤフヤー・サアラブ Aḥmad b. Yaḥyá Tha'lab (d. 291/904) から伝えており，またイブン・ムウタッズが二人の伝達者名を添えた逸話とイスナード無しの逸話の二例を伝えている [Aghānī XIV: 175-7; Shu'arā': 90-2][17]。

さらに，上記の内容に逮捕理由を加えた逸話が存在する。ムバッラドが不特定の情報源から伝えたものであり，それによれば

サーリフはマフディーの御前においてザンダカの疑いをかけられた。マフディーが彼に「汝はこのような詩を詠んでいたな。

『私は多くの秘密を隠し，静かに押し黙る

もし人々が私の知識を知ったなら，向かう先は牢獄のみ』と」

と言うと，サーリフは「悔悛し（正しい道へ）戻ります」と言った。[Amālī I: 145]

とされている。ここではサーリフが何らかの知識ないし信仰を隠しているということが逮捕理由とされているが，このことはマフディーがイスラーム社会に潜む異端を排し，信仰を正す者として対ズィンディーク政策を行ったことを連想させるものである。その後の展開は上記の逸話と同様であり，マフディー（或いはラシード）は『年老いた者は～』の詩を引用してサーリフの処刑を命じる。以上の一連の逸話は基本的な内容が共通していることから，同一の起源を持つと考えられる。

以上のことから，ヒジュラ暦3世紀半ば頃からサーリフがズィンディークとしてカリフに捕らえられ処刑されたのだという逸話が流布し，またそこに秘密の信仰という逮捕理由が付与されたことが推測される。サーリフの伝説的な異端イメージはその後強まっていったと見

---

17) なお，イスファハーニーの伝えるものとイブン・ムウタッズの伝えた逸話のうちの一つは，カリフ名がマフディーではなくラシードになっている。またヤアクービーは 167/783-4 年の記事に同様の逸話の概要を伝えているが，審問者はカリフではなくヤアクーブ・ブン・ダーウードとなっている。しかしヤアクーブは 166/782-3 年に投獄されていることから，この記事内容は矛盾している。[Ya'qūbī II: 398; Ṭabarī III: 506-517]

られ，ムルタダーは異端審問に際してマフディーがサーリフに『ザンダカの書 *Kitāb al-Zandaqah*』なる書物を読めるかを試そうとする，という伝説的逸話を，イスナードを付さずに伝えている［Amālī I : 144］。

3 マニ教・二元論に纏わる逸話

サーリフの思想に異端的な性格を付与する最初の逸話は，ヤムート・ブン・ムザッラア Yamūt b. al-Muzarra' (d. ca. 303/915) がムハンマド・ブン・イーサー・ナッザーム Muḥammad b. 'Īsá al-Nazzām から伝えた以下のような逸話である。

> サーリフ・ブン・アブドゥルクッドゥースの息子が死んだとき，アブー・フザイル Abū Hudhayl が彼のもとへ行った。若き日のナッザームも付いて行き，お悔やみを述べた。打ちひしがれた（サーリフ）を見て，アブー・フザイルが彼に「お前によれば人間は草木のようなものだというのに，なぜ嘆くのか」と尋ねると，サーリフは「アブー・フザイルよ，私が悲しんでいるのは彼が『疑念の書 *Kitāb al-Shukūk*』を読まずに死んだからだ」と答えた。アブー・フダイルが「『疑念の書』とは何か」と尋ねると，彼は「私がその書を著し，それを読んだ者が全てを疑い，そうであることをそうでないと考え，そうでないことをそうであると考えるように仕向けた」と答えた。そこでナッザームは「ではあなたは息子が死んだということを疑い，彼が死んだことを死んでいないと考え，彼がその本を読んでいないことを読んだと考えると良い」と返した。［Talbīs : 50-1］

ここに登場するアブー・フザイルはムウタズィラ派初期の名高い学者の一人である［Nyberg 1960 : 127-129］。ショクルによればナッザームはその甥であり，160 年代の半ば頃に生まれたと考えられる。そのため，サーリフが亡くなったとされる 167 年には上記のような機知にとんだ議論が可能な年齢ではない。ショクルはこの逸話はナッザームの才気を誇るものとして後に語られたものであると結論付けており，『疑念の書』についてはこの系統の逸話以外には現れず，その実在は疑わしいとしている［Chokr 1993 : 226-8］。しかし，この逸話は後代の著述家にも受け入れられたと見られ，サーリフをマニ教徒と見なしたイブン・ナディーム（d. ca 388/998）もまた，この逸話を記載している[18]。

サーリフを明確にマニ教や二元論に関連付ける逸話は，ムルタダー（d. 436/1045）が情報源を示さずに記した以下のような記述にも見ることができる。ここでもまたアブー・フザイルとの会話というモチーフが用いられている。

> サーリフ・ブン・アブドゥルクッドゥースは二元論 thanawīyah の宗派に属していたことが明らかである。言われているところによれば，アブー・フザイルが彼を見かけて以

18) ただしイブン・ナディームの記述ではナッザームの名は消え，最後の言い返しもイブン・フザイルが行ったことになっている。これについてショクルは，アブー・フザイルの才気を強調する逸話へと改変されたためであろうとしている［Fihrist 285 : Chokr 1993 : 226-8］。

下のように話しかけた。「サーリフよ，汝は何に頼っているのか？」と。すると彼は「私は神を頼り，二元論に基づいて発言する」と言った。（中略）また言われていることによれば，アブー・フザイルは彼（サーリフ）が主張する光と闇の混合に関するよく知られた問題について，彼と議論した。[Amālī I: 144]

光と闇の混合はマニ教の根本教義である。この逸話からは，この頃サーリフを明確にマニ教徒と見なす言説が流布していたことがわかる。

サーリフはまずヒジュラ暦3後半ば～4世紀初頭に現れる逸話においてアブー・フザイルやナッザームと会話する懐疑論者として登場し，イブン・ナディームやその後のムルタダーの頃には，アブー・フザイルとの会話のモチーフとともに，明確にマニ教徒としての性格を獲得していたことがわかる。

おわりに

本稿ではアッバース朝カリフ，マフディーが行った対ズィンディーク政策との関連や逸話の出現時期に留意しつつ，『目録』にマニ教徒或いは二元論者として現れるバッシャール・ブン・ブルドとサーリフ・ブン・アブドゥルクッドゥースの逸話がどのように展開してきたかを考察した。その結果，理由は定かではないが，彼らがズィンディークとしてカリフに処刑されたとする逸話がヒジュラ暦3世紀以降に現れ，末頃までにそれぞれ詳細が付与される中で言説化した可能性が示唆された。同時に彼らをマニ教や二元論に関連付ける逸話も3世紀半ば～後半頃に現れ，4世紀末～5世紀前半頃にはさらなる詳細がつけ加わって成型されていたと見られる。

二人の詩人のうち少なくともバッシャールについては，彼の死が有力者の私怨によるものであったとの同時代人の報告から，対ズィンディーク政策によるものであったとの言説，さらに神を拒絶する異端者であったという虚構的かつ伝説的な言説が表れた過程を追うことが出来た。マニ教の影響を受けたムスリムを正すためとして行われた（少なくともそのように考えられていた）対ズィンディーク政策の標的となったという逸話が発展したことで，その後の彼らについての言説に異端的かつ伝説的な要素が付与されやすくなったのではないかという可能性が考えられる。しかし，本稿における分析のみからこれ以上の考察を行うことは不可能であろう。

ヒジュラ暦3世紀から4世紀にかけては，イスラームにおける正統教義が明確化された時期である。丁度その時代に，過去に活躍した文人の異端的逸話が広まっていくということには，どのような意味があったのか。このことを考察するためには，マニ教・二元論に関係するもの以外の逸話も含めて彼らに付与される異端的逸話を総合的に収集し，その発展過程を明らかにしたうえで，内容の分析を行わなければならない。また，バッシャールとサーリフ以外にも，ヒジュラ暦2世紀に活躍しその後の時代にズィンディークとしての伝説的逸話が

語られる人々が存在する。そうした各逸話の出現と発展過程について，今後分析を進める必要があろう。

参考文献

Aghānī : Abū al-Faraj al-Iṣfahānī, *Kitāb al-aghānī*. 24 vols. al-Qāhirah, 1927-1974.

Amālī : Abu l-Qasim 'Alī ibn al-Ḥusayn al-Sharīf al-Murtaḍá, *Amālī al-murtaḍá : ghurar al-fawā'id wa-durar al-qalā'id*. 2 vols. Bayrūt, 1967.

Ansāb : Ibn Ḥazm, *Jamharat ansāb al-'Arab*. Bayrūt, 1998.

Bayān : 'Amr ibn Baḥr al-Jāḥiẓ, *al-Bayān wa-al-tabyīn*. 4 vols. Bayrūt, n. d.

Chronique : Michael the Syrian, *Chronique de Michel le Syrien*. trans. into French by Chabot J. B., Paris, 1899-1905.

Dīwān : Bashshār ibn Burd, *Dīwān Bashshār b. Burd*. 4 vols. Cairo, 1950-1957.

Farq : 'Abd al-Qāhir ibn Ṭāhir al-Baghdādī, *al-Farq bayna al-firaq*. Bayrūt, 1978.

Fihrist : Muḥammad ibn Isḥāq al-Nadīm, *Fihrist*. Bayrūt, 1996 ; *The Fihrist of al-Nadīm : a tenth-century survey of Muslim culture*. ed. and trans. into English by B. Dodge, New York, 1970.

Ḥayawān : 'Amr ibn Baḥr al-Jāḥiẓ, *Kitāb al-ḥayawān*. 7 vols. Bayrūt, 1969.

Irshād : Yāqūt ibn 'Abd Allāh al-Ḥamawī, *Mu'jam al-udabā' aw Irshād al-arīb ilá ma'rifat al-adīb*. 6 vols. Bayrūt, 1991-1993.

Kāmil : Muḥammad ibn Yazīd al-Mubarrad, *al-Kāmil fī al-lughah wa-al-adab*. 2 vols. Bayrūt, 1997.

Khalīfah : Khalīfah ibn Khayyāṭ 'Uṣfūrī, *Tārīkh Khalīfah ibn Khayyāṭ*. Dimashq, 1967-1968.

Lisān : Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Lisān al-mīzān*. 7 vols. Bayrūt, 1986.

Shi'r : Ibn Qutaybah, *al-Shi'r wa-al-shu'arā'*. Bayrūt, 1997.

Shu'arā' : Ibn al-Mu'tazz, *Ṭabaqāt al-shu'arā'*. Cairo, 1968.

Ṭabarī : Abū Ja'far Muḥammad ibn Jarīr al-Ṭabarī, *Tārīkh al-Ṭabarī : Tārīkh al-rusul wa-al-mulūk*. Cairo, 1979-1993. ; *The history of al-Ṭabarī*. trans. into English by Kennedy, H., C. E. Bosworth, New York, 1989-.

Talbīs : Abū al-Faraj ibn al-Jawzī, *Talbīs Iblīs*. Bayrūt, n. d.

Wuzarā' : Muḥammad b. 'Abdūs al-Jahshiyārī, *Kitāb al-wuzarā' wa-al-kuttāb*. 2 vols. Cairo, 1980.

Ya'qūbī : Aḥmad ibn Abī Ya'qūb Ya'qūbī, *Tārīkh al-Ya'qūbī*. 2 vols. Bayrūt, 1960.

Blachere, R. (1959) BASHSHĀL B. BURD. *Encyclopaedia of Islam : New Edition* 1. Leiden, 1080-1082.

Chokr, M. (1993) *Zandaqa et zindiqs en Islam au second siècle de l'hégire*. Damas.

Crone, P. (1980) *Slaves on horses : the evolution of the Islamic polity*. Cambridge.

Crone, P. & M. Hinds (1986) *God's Caliph : Religious authority in the first century of Islam*. Cambridge.

Gabrieli, F. (1961) La "Zandaqa" au Ier siècle Abbasside. In : *L'élaboration de l'Islam : colloque de Strasbourg, 12-13-14 juin 1959.* Paris.

Goldziher, I. (1893) Ṣāliḥ b. 'Abd al-Kuddūs und das Zandikthum wāhrend der Reierung des Chalifen al-Mahdī. In : E. D. Morgan (ed.), *Transactions of the Ninth International Congress of Orientalists (held in London, 5th to 12th September 1892).* vol. 2. London.

Josephson, J. (2006) The hellenistic heritage of the zanadiqa. In : E. Lutz (ed.), *Current issues in the analysis of Semitic grammar and lexicon II : Oslo-Göteborg Cooperation 4th-5th November 2005.* Wiesbaden.

Lewis, B. (1953) Some Observations on the Significance of Heresy in the History of Islam. *SI* 1, 43-63.

Nyberg, H. (1960) ABU'L-HUDHAUL AL-'ALLĀF. *Encyclopaedia of Islam : New Edition* 1. Leiden, 127-129.

Sezgin, F. (1967) *Geschichte des arabischen Schrifttums.* 11 vols. Leiden.

Shaban, M. A. (1970) *The 'Abbāsid revolution.* Cambridge.

Taheri-Iraqi, A. (1982) *Zandaqa in the early Abbasid Period with special reference to the poetry.* Boston Spa.

Turner, J. P. (2013) *Inquisition in Early Islam : The Competition for Political and Religious Authority in the Abbasid Empire.* London.

Vajda, G. (1937) Les zindīqs en pays d'islam au début de la période abbaside. *Rivista degli studi orientali* 17, 173-229.

Watt, W. M. (1998) *The formative period of Islamic thought.* Oxford ; originally published in 1973, Edinburgh.

Zakeri, M. (1995) ṢĀLIḤ B. 'ABD AL-QUDDŪS. *Encyclopaedia of Islam : New Edition* 8. Leiden, 984-985.

Zaman, Q. M. (1997) *Religion and Politics under the the early 'Abbāsids : The Emergence of the Proto-Sunnī Elite.* Leiden.

岡崎桂二（1992）バッシャール・ブヌ・ブルドとバディーウ『オリエント』35(2), 39-55.

嶋田襄平（1996）『初期イスラーム国家の研究』中央大学出版部.

田中悠子（2013）アッバース朝初期の「ザンダカ」に関する一考察 —— 逮捕・処刑事例を手がかりに ——. 平成 24（2012）年度京都大学大学院文学研究科修士論文（未公刊）.

（京都大学大学院文学研究科）